

ウイルス感染後、22週1児に胎児水腫を認めた。皮下浮腫は改善するも腹水は著明であった。23週には胎児水腫は消失した。37週母体適応にて緊急帝王切開術施行。両児とも異常所見なく、胎盤免疫染色パルボウイルス B19 (－) であった。パルボウイルス感染により DD 双胎の1児のみに胎児水腫をきたしたが、自然寛解する例も多く、侵襲的な検査や治療には注意が必要である。

## 6 妊娠末期に著明な血小板減少を示し血栓性血小板減少性紫斑病が疑われた1例

山口 雅幸・吉田 邦彦・上村 直美  
山田 京子・芹川 武大・高桑 好一

新潟大学医歯学総合病院  
総合周産期母子医療センター・  
産婦人科

症例は20代、0妊0産。特に異常なく他院で妊娠管理されていたが、妊娠36週時に両下肢紫斑が出現、血小板数減少にて当院紹介。血液検査にて血小板数  $1.5 \text{ 万}/\mu\text{L}$ 、ADAMTS13 活性低下が判明、血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) が疑われた。新鮮凍結血漿投与開始後に血小板数増加を認め、妊娠37週で termination とし生児を得た。妊娠に合併する TTP は極めてまれであり文献的考察を含めて報告する。

## 7 周産期における虐待予防

鈴木 美奈・水野 泉・関根 正幸  
安田 雅子・遠間 浩・安達 茂実

長岡赤十字病院産婦人科

児童虐待が増加の一途をたどっている。H22年度の全国児童虐待は前年より1万件以上増え5万5152件と報告されている。社会的な関心の高まりは認められるものの、予防を確実に行くには、我々、周産期従事者の意識改革が必要と考えた。長岡市の要保護児童対策地域協議会関係者よりいただいた資料を基に、虐待の現状、および我々の果たすべき役割について報告する。

## 8 常位胎盤早期剥離ならびに術後肺胞出血を発症した重症 SLE 合併妊娠

田村 正毅・山岸 葉子・常木郁之輔  
棚瀬 徹・倉林 工・長谷川 尚\*

新潟市民病院産婦人科  
同 腎臓・リウマチ科\*

SLE 診断後、コントロール不良のまま妊娠成立した症例を経験した。妊娠後、内服ステロイド量は増加し、妊娠31週に常位胎盤早期剥離を発症し、緊急帝王切開術で児は救命。しかし、術後母体の腹壁さらには手術創部とは関係ない後腹膜内出血を認めて再開腹を施行。さらに SLE が原因と考えられる肺胞出血を発症。計3回の救命センター管理ならびにステロイドパルス療法にて救命することが出来た SLE 合併妊娠を経験したのでここに報告する。

## 9 新生児化膿性股関節炎の1例

鈴木 亮\*・竹内 一夫・小松原孝夫\*\*  
堀 智里・松井 俊晴・田中 篤  
郡司 哲己

長岡中央総合病院小児科  
県立新発田病院小児科\*  
県立六日町病院小児科\*\*

*Mycoplasma hominis* は *Ureaplasma* と共に絨毛羊膜炎の分離菌や早産児の慢性肺疾患との関連で知られる。我々は *M. hominis* による皮下膿瘍、化膿性股関節炎を発症した新生児例を経験した。患児は子宮内感染が疑われたため出生時より抗菌剤を投与した。各種培養は陰性で、起炎菌不明のまま悪化し化膿性股関節炎へ進展した。関節液、臍帯の PCR で *M. hominis* が検出された。垂直感染により侵襲性感染症に至った稀な症例と考えられた。